

新潮文庫

絶望の挑戦者

大藪春彦 著



新潮社

ぜつ ぼう ちよう せん しや
絶望の挑戦者

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草81 D

昭和五十一年十月三十日 発行
昭和五十一年十二月十日 二刷

著 者 大 藪 春 彦
お お やぶ はる ひこ

発 行 者 佐 藤 亮 一
佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 新 潮 社
会 社 新 潮 社

郵便 番号 一六二
東京 都 新宿 区 矢来 町 七 一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四二
振替 東京 四 一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社 製本・憲専堂製本株式会社

© Haruhiko Oyabu 1976 Printed in Japan

新 潮 文 庫

絶 望 の 挑 戦 者

大 藪 春 彦 著

新 潮 社 版

2361

目次

第一部 危機に立つ狼……………七

第二部 牙を磨ぐ虎……………一七三

解説 権田萬治

絶望の挑戦者

第一部 危機に立つ
狼_{おおかみ}

脱
落

一

武田進は、津久井湖に流れこむ道志川を遡って山梨県に入ったところにある山荘で、コピー資料をデスクに拡げ、それをときどきめくりながら原稿用紙にモンブランの万年筆を走らせていた。その山荘は、狛小屋であった。粗末なプレハブの十五坪もない小屋だ。一番近い部落から六キロは離れている。

眉間に縦皺を寄せて原稿を書いている武田は三十五歳。シャープな顔には贅肉の一片もつていなかった。背にした炉の薪の火で暖をとっている。

狛服と兼用の米軍用のオリーヴ・グリーンの作業服に包まれた肩は、たくましくせに、どこか淋しげな翳があった。

デスクの前の明り通りの窓から、雑木林の向うに丹沢の山々が見える。デスクの左横は大きな金庫だ。右側の壁には、M1ライフルを狛用に改造したやつと、軽いフランキ自動五連の散弾銃が吊ってあった。弾帯もだ。

遠く離れた溪流のほうで、犬の悲鳴があがった。武田は万年筆の動きをとめる。

イノシシ用の愛犬のプロット・ハウンドのジョーの声だ。悲鳴をたてるとは、どうしたのだろう？ マムシが出る季節では無いし、もしイノシシと闘って傷を負ったのだとしたら、その前に追ひ^な啼きの声が武田に聞えていた筈だ。

そうすると、密猟師がかけた罠^{わな}にでもかかったのであらうか？ ジョーは、イワナを釣りに出た妻の鮎子^{あゆこ}と娘の鱒子^{ますこ}と一緒に筈だが、二人の身に危険は無いであらうか？

万年筆を放りだした武田は、立上ると、壁にかかっていたズックの弾倉帯を素早く腰に捲いた。M1ライフルを握って戸口に歩きかけ、デスクのほうに引返した。

金庫のダイヤルを廻す。ダイヤル錠が二つついて、補助鍵を必要としないタイプの金庫だ。金庫の重いドアを開くと、昨日までに書いた原稿の束と、資料の山があった。武田はデスクの上にある書きかけの原稿と、ひろげてあった資料を金庫に仕舞った。

それらの資料は、ロータリー・エンジンの実用化に成功した沼津の東和自動車工業を乗取ろうとしている、米国デトロイトの三大メーカーの一つであるクリンガー自動車の日本支部への指令書の数々の写しと、すでに七分通り乗取りの布石に成功した支部から本社へ送った報告書のコピーの再複写であった。

原稿のほうは、東京にある出版社「未来書房」の依頼で、日本の自動車工業を下請け工場化している、デトロイトの悪辣^{あくらう}なやり方を暴露したものだ。

武田はもと、クリンガー自動車の日本支部である合弁会社新日自動車の企画調査部第三課長であった。はっきり言えば、クリンガーの東和自動車乗取りの秘密工作員であったわけだ……。

金庫を閉じ、ダイヤル・ロックを掛けた武田は、銃を手にして表に出た。寒い。小屋の軒から、

十数羽のヤマドリやウサギのほかに、ワタ抜きした百キロほどのイノシシがぶらさがり、カチカチに凍りついていた。武田が射ったそのイノシシは、もうすぐ肉が熟れて食い頃になる。裂かれた腹からの溶け落ちた肉汁が凍って赤っぽいツララのようになっていた。

東湘南高校時代にA・R、つまり空気銃射撃競技の高校射撃連盟のチャンピオンであり、K大時代にはS・Bすなわち小口径ライフルの射撃競技でアジア選手権大会に優勝したこともある武田は、社会に出てからも銃を放さなかった。自分がやりきれなくなったとき、銃を手にして射場や獺野のなかに救いを求めたことがしばしばあったのだ。

小屋の前の空地に、ラリー用の固い足廻りをつけたトヨタ一六〇〇GTがあった。武田は雑木林のなかをくぐって溪流のほうに走っていった。ドロミテのハンティング・シューズが、力強く凍った大地を踏みしめる。

流れまで、五百メートルはあった。途中にある竹藪を避けて迂回すると、蹴爪で落葉をひっかいていたコジュケイの群れが、驚かされたニワトリのような鳴き声をあげ、小さな体に似合わぬ激しい羽音を残すと、赤っぽいゴムマリのように左手の暗い杉林に跳びこんだ。

里を追われたコジュケイは、ヤマドリの棲むこんな山奥にまで逃げこんできたのか……まるで、クリンガー自動車に追われた俺のようだ……武田は唇を歪めた。

妻と娘のことが、急にひどく心配になる。

クリンガーの死刑執行人は、ついに、俺の山荘を発見したのだろうか？……そんな馬鹿な……この山荘は、かつて山梨の射場で知りあった不動産屋のハンターから現金で買ったのだが、所有権移転の手続きをとってないから名義の面からは奴等に分る筈は無い。出版社にもこの獺小屋の

ことは知らせてない。

しかし、不吉な胸騒ぎは消えなかった。武田は遊底を少し引いてみて薬室に装填そうてんされていることを確かめた。遊底を完全に閉じ、左手を銃床前部に添えると、右手の人差し指を引金の用心トリガー・ガード鉄いそのなかに差しこみ、人差し指の背で用心鉄前部についている安全装置をいつでも押し外せるように身構えた。

実弾用の直径四ミリもある大きな覗き孔のぞのピープ・サイトは、二百メートルに合わせて、五十から三百メートルの距離にあるシカやイノシシ大の動物なら、サイトを無修正のままで三〇—〇六口径の百八十グレイン・シルヴァー・チップ弾もブチこめるようにしてある。五十メートル以下なら、腰だめでも命中出来る自信が武田にはあった。

鋭い視線を左右に配りながら、武田は歩き続けた。竹藪の向うに出る。溪流の音が高く聞える。そのときであった。プロット・ハウンド犬のジョーの死体を見たのは。

ジョーは、喉のどを大きく掻き切られていた。イノシシの牙きばによってではない。鋭利な刃物でだ。二十メートルほど血を曳ひいて走ってから倒れた跡があった。

手負いジシのように雑木の枝を体でへし折りながら、武田は近くになった溪流に走った。血相が変っている。

幅十メートルほどの流れは、岸寄りに氷が張っていた。鮎子たちの姿は見えない。

「……………！」

武田は、声をかぎりに、妻と娘の名を呼んだ。

返事は無い。

武田は、足許に視線を落した。猟にかなりの経験を持っている武田の瞳は、凍った固い地面にわずかに残った、鮎子と七歳の鱒子のブーツの足跡を見つけることが出来た。

足跡は上流のほうに向いていた。

素早くうしろを振り向いて様子をさぐってから、武田は足跡を追いはじめた。人差し指の背で安全装置を外す。

溪流は曲りくねり、岸には常緑灌木が茂っていて、見通しはまったく悪かった。

武田は、今度は声をたてず、足音を忍ばせて慎重に足を運ぶ。心臓は、胸のなかで赤ん坊が勝手に大暴れしているような具合であった。

鮎子たちの足跡が流れのほうに降りたあとを見つけたのは、そこから百五十メートルほど行つたところであった。流れはそこで淀んでゐる。

そして、岩と石ころだらけの砂地の上に、鮎子たちの足跡に混って、幾つもの男の登山靴の足跡があった。それに、争ったような形跡も……。

武田の心臓は巨大な手に掴まれたように縮みあがった。斜面に露出している木の根子を左手で握って、狭い砂地に跳び降りる。無意識のうちに、暴発を防ぐために銃に安全装置を掛けていた。血は落ちてなかった。釣道具も残されてない。武田は斜面を這いあがると、鮎子たちが移動した足跡は無いかと地面を見つめた。

鮎子たちの足跡のかわりに、男たちの足跡が入り乱れていた。武田はそれを追う。

大学の法学部を出てからデイリー湘南新聞の経済記者をしていた武田のところに、市場調査マーケット・リサーチを本業とする米国資本系の広告代理店アンダーソン報智堂のスカウトマンが訪れてきたのは五年前のことであつた。

デイリー湘南は、現在故人になつた元國務大臣、元建設大臣の川野が社主であつた。党人派のボスとして保守党総裁、つまり首相の地位を狙う川野は、やはり彼が所有している湘南テレビやラジオ湘南と共に、デイリー湘南を世論という形で保守党党人派や反対派に圧力をかける手段として利用すると共に——自分が関係していたり乗取ろうとしている会社の株価操作に利用した。神奈川では一、二を争う発行部数を持つ新聞のことであるから、デイリー湘南の影響力は大きく、大企業は争つて広告料を払うだけでなく、川野に政治献金を差しだした。

入社してから、二、三年は、武田は熱心に働いた。

しかし、せっかく苦勞して情報をとつて原稿を書いても、川野に不利になるような記事だと、けんもほろろにキャップやデスクから突つ返されることを、何度となく経験しているうちに、武田はアルバイトをはじめたようになった。

つまり、口止め料稼かせぎだ。保守党官僚派が関係して甘い汁を吸っている大企業が表沙汰にされたくないことを嗅かぎつけると、それを記事にし、デイリー湘南の名刺を持つて相手の会社に乗りにこむわけだ。

月給の十倍ぐらいの金は簡単に作れた。金を受取り、相手の会社の担当者の目の前で原稿を破つて安心させると、新聞社の上役に密告してくる者はいなかった。どの大企業も、総会屋や恐喝専門の業界紙にそなえて、たつぷり機密費を用意してある。

武田は、K大在学中に死んだ父が横浜の弘明寺くみょうじに遺のこしておいてくれた二百坪の土地に、妻子のための家を新築すると、新聞社の仕事のほうは適当にお茶を濁し、狩猟と酒と女の無頼ぶらいな生活に明け暮れた。

老母は、亡父のやっていた貿易会社を受けついだ兄のところに引きとられていたから、武田は気楽なものであった。

しかし、やはり破綻はたんはきた。

夜の銀座でもいい顔になった武田が、クラブ「ノワール」のホステス純子にせがまれてマンションの続き部屋を買ってやるために、ある製薬会社から、まとまった金を恐喝したことが、川野にバレたのだ。

その会社は、官僚派と党人派の二股ふたまたをかけていた。

武田は上役にこっそり油を絞られた。

だが、武田は居直った。

「金も返さないし、辞表も出さない。懲戒免職に出来るものなら、やってみろ。そうしたら、川野がやってきたことも、デイリー湘南の本当の役目も暴露してやる」

と、せせら笑ってやったのだ。

その夜、横浜の伊勢佐木町のバー街の暗がりでは、武田は川野の命令を受けた暴力団銀城会の若い衆八人に取り囲まれた。

川野は、官僚派が大企業に有利な法律や法令を作って荒稼ぎしているのに対抗し、建設大臣や運輸大臣などを自分の子分で固めて利権あさりをやり天文学的な数字の金を稼いでいたが、その

金の一部で全国の暴力団を自分の支配下に置き、官僚派に対する命知らずの圧力団体とさせようとしていた。

したがって、全国の組織暴力団の半数近くは、川野の命令のままに動いたのだ。

武田と刺客たちは、けもののように闘った。放蕩無頼の夜を送っていても、狼で鍛えた武田の体はさしてなまってなかった。

十分後に闘いのケリがついたとき、武田は脇腹を短刀で削られ、左股を切られていたが、相手の八人のほうも、腕や背骨をへし折られたり、胃や睾丸を潰されたりして戦意を失っていた。

タクシーを拾った武田は、海岸通りにあるデیلیー湘南に戻った。血まみれの武田を見て驚く夜勤の社会部の連中を尻目に、鍵がかかった医務室のドアを蹴破ってそのなかに入り、パンツ一枚になって傷の手当をした。

裸に近い格好のまま、経済部の部屋に上った。居残りのキャップ前田の前に黙って立ってみせると、前田は亡霊を見たかのように蒼白になって震えはじめた。

武田の傷が直っても、川野は新手の刺客を差し向けなかった。さすがに、警察のなかの反川野派や他のマスコミに知られることを恐れたのであろう。

だが、武田が調子に乗って、また会社ゆすりをはじめたら、川野はどんな手を打ってくるかも分らなかった。警察のなかの川野の息がかかっている連中に逮捕させる振りをし、抵抗して逃走を計ったという理由をつけて武田を射殺させることぐらいやりかねない。

そうやって、武田が川野たちと冷戦状態に入っているとき、アンダーソン報智堂からのスカウトマンがやってきたのだ。